

Gikyohan Times

No.0002

岐阜県教販通信

2020年7月発行

岐阜県の学校現場の皆さんと考える 「コロナ後」の教育

当社は岐阜県の全小中高校に紙の教科書を供給し続けて100年以上の会社です。今後紙の教科書、教材、指導書がデジタルに変遷していく、教育のITC化、オンライン化していくなかで当社として教科書に関する様々な情報を「岐阜県教販通信」として提供していきます。今回のテーマは「コロナ後」の教育の第一弾として寺脇研氏に提案して頂きました。是非ご一読ください。コロナ後の教育に役立てればと思います。今後とも岐阜県教販通信をよろしくお願いいたします。
岐阜県教販株式会社 (<http://gikyohan.dip.jp/>)



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952年)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でなし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

長かった一斉休校が終わり、各学校は再開の手順に苦心を重ねたことだろう。特に、先生方のご努力には深く敬意を表したい。なにしろ、全国一斉休校なんて、明治5(1872)年以来148年間に及ぶ日本の学校制度で初めてのことなのだ。全国民が、改めて学校の存在意義を感じたことだろう。同時に、その運営を支えているすべての職員の仕事の大切さに気づいてくれたとしたら、学校に対する今後の意識も変わってくるだろう。新型コロナが流行した初動段階で、われわれ皆が医療従事者たちの献身的な仕事ぶりに感謝した。続いて自粛で家にこもった生活を支えるために働いてくれる、運送、配送、食品販売などの業種に助けられた。これらの人々は、エッセンシャル・ワーカー(生活を営む上で欠かせない仕事をする人)と呼ばれ、極めて尊重されている。そして今、学校へ戻ってくる子どもたちを迎え、彼らがウイルスに感染しないよう細心の注意を払いつつ学校生活をできるだけ元通りに近づけようと奮闘している現場の教職員もまた、エッセンシャル・ワーカーと言えよう。皆さんの頑張りあってこそ、子どもたちは心身とも健やかに育つことができる。

と同時に、われわれは、否応なしに対処を迫られる「コロナ後」と称されるこれからの時代の教育について真剣に考えていく必要がある。当面の対応だけでなく中長期的な未来をも見据え、教育の在り方を根本的に見直すべきだ。

今年度から実施の新学習指導要領が打ち出す「主体的・対話的で深い学び」、小学校英語、プログラミング、そして子ども1人に1台のPCを配備する「GIGAスクール構想」と、教育界にはこれまでにない新しい取り組みが一気に押し寄せてきていた。しかし、これらは全部<コロナ>の前に打ち出されたものである。

あの時点とは全く変わったものになろうとしている世の中で、これまでと同じ意識でそれらを受け入れていいのか。それが今、問われている。

この通信に問題提起の場をいただいたのを契機に、以前からさまざまな機会でご一緒してきた岐阜県教育界の皆さんと、「コロナ後」の教育の在り方について共に考えてみたいと思う。これまでも学校教育に関する熱心な議論を重ねてこられた岐阜県から、我が国の新時代の教育モデルを着想していくことができれば、うれしい限りである。

この通信から発信し続けていきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。